



# 学校を離れて思うこと 悴田 智子

読者の皆様、初めまして。今年1月に高校を退職し、国際NGO<sup>i</sup>に入職した者です。今度の職場も教育関係であることから、寄稿するご縁をいただきました。

現在勤めている公益財団法人CIESF(シーセフ)<sup>ii</sup>は、2008年設立の小さな団体です。国際NGOと聞くと、途上国のへんぴな場所で活動するイメージを持たれることと思います。当財団はその点、NGOらしくないかもしれません。主力事業は、カンボジアのプノンペン郊外にある、シーセフ・リーダーズ・アカデミーという、幼小中一貫校(1学年20名、全校生徒120名)の運営と支援<sup>iii</sup>です。



## 生徒の履歴書指導をしながら

国際協力を目指したきっかけは、初任校(高北)での海外修学旅行に遡ります。26歳で初めて海外の地を踏んだ私は東南アジアが大好きになり、高崎市の日本語ボランティアや大学院での研究を経てこうなりました。

2校目(高工)には自己啓発等休業<sup>iv</sup>の2年を挟んで約11年勤め、情報技術科と建築科を卒業させました。どちらも大変なクラスで、家に帰ればしょっちゅう泣いたり飲み過ぎたりしましたが、高工は教師であることの楽しさを教えてくれた場所でもありました。

建築科が3年生に進級する直前、かの一斉休校が始まり、その後彼らが卒業するまで、

教師生徒ともども翻弄されました。すべてがコロナのせいではありませんが、この頃の私は、教師として頑張り続ける意味を見失いつつありました。同時に、クラスを40人全員で卒業させることができ、もう教師としての役割は十分果たしたという気になりました。

海外駐在を第一希望にした就職活動は難航しました。夏休みは、学校で履歴書指導をして、家に帰ると今度は自分の志望動機を推敲する日々でした。秋になり面接に進んでも、「国際協力のアクターは多くありますが、なぜNGOで働きたいのですか?」と難しい質問を投げかけられました。

退職願を出したとき、校長には、その団体、大丈夫なの?と聞かれました。こっちが聞きたいよ!という本音を飲み込みはしましたが、教師からの転職者は自分が知る限り、皆あまり成功していない、とさらに不安を煽られました。(笑)

## ファンドレイジングという仕事

さて私は、広報・ファンドレイジング(FR)の業務を担当しています。前者では、国語教師の経験を活かし、メールマガジンを発行しています。メールマガジンは重要な広報手段ですが、当財団は小規模なため手が回っていませんでした。そこで私が、メールスタンドの選定から関わっています。設備の導入と運用にひとりで責任を持つのは初めてでしたので、これは私の大切な仕事です。

この冊子が発行される頃には、都内の高校に出前授業にも出かけているでしょう。本当はこういう仕事ばかりだとうれしいのですが。

FR業務は、基礎から学びながら事業に取り組んでいます。FRとは、団体の存在を知らせ、理念と活動に共感していただき、活動をご支援いただく、という一連の流れを指します。私の初めてのFRは、8月から始まるクラウドファンディングです。

もともと、東南アジア関連のNGOを寄付

という形で応援してきました。中の人になった今、他団体の活動から学んだり、国際協力業界の情報を得られるようになったりしたこと（中には、某大手ブラック企業の社長もNGOをつくって途上国を支援しているという、もやもやする話もありますが…）も楽しいです。



## もう先生じゃないんだっ…

一方で、最近は不安や悩みも出てきました。新しい働き方であるテレワークは、最初こそ気ままでしたが、自分にはつらい働き方です。

自画自賛ですが、「雑談が楽しい先生」で鳴らしていましたので、授業のネタを探してしまう癖もそのままです。もう私、先生じゃないんだっ…と我に返るときのさびしいこと。

学校の賑やかさが自分を生かしていたし、生徒あってこそ、教師としての自分が存在できたと感じています。今は、自分のように40代で転職した人のエピソードを探しては、かろうじてモチベーションを保っています。

## 「在る」こと自体ソーシャルグッド

私が学校を離れたのは、学校の嫌な点ばかりが目につくようになり、さらに、教師に求

められる様々な圧力が窮屈だったからです。しかし今、学校にしかない良さがたくさんあると自信を持って言えます。

そして、これを読まれている先生たちに伝えたいことがあります。無責任に学校や教師を罵る不届き者は方々におりますが、教師とはとんでもなくハイスペックな頭脳集団であり、大切な社会関係資本です。そして、世の中の罪からいちばん遠い地点に立つことのできる職業である、とも思うのです。だからどんなときも、誇りを失わずにいてほしいと思います。なぜなら、教師として生徒の前に「在る」ことそれ自体が、すでにソーシャルグッドなのですから。

## 今でも学校の夢を見ます

学生として、そして教師として人生前半の長い時間を過ごした「学校」は、私の大切な場所です。今でも、授業や朝のホームルームをしている夢を見ます。

入学試験目前の退職にもかかわらず、最終日の17時には、職員室にいた全員から拍手で温かく送りだしていただきました。国際協力の道で生きていきます、と宣言した手前気が引けますが、そう遠くないうちに学校に帰る選択をするかもしれません。その時はもう一度、温かく迎えてください。

当財団に関心を持っていただけた方や、人との触れ合いが減ってしまった私と交流してくださる心優しい方がいらっしやいましたら、t-kaseda@ciesf.org まで『育ちと学び』、読んだよ』とお書き添えの上、ご連絡ください。長文にお付き合いいただき、ありがとうございました。

<sup>i</sup> NGO=非政府組織。NPO=非営利組織。公立学校は文科省の傘下ですので、NPOとは言えますがNGOではありません。また、日本では非営利団体を税制上の規則に従い、「社団法人」「財団法人」「認定NPO法人」等に分類しています。このことから、NGOとNPOの明確な区分は難しいのです。

<sup>ii</sup> Cambodia (Cross border) International Education Support Foundation の略称

<sup>iii</sup> カンボジアはポル・ポト政権により教育環境が破壊つくされましたが、この国で学校を建設することの功罪が議論されていることも事実です。校舎=ハコモノを建てるだけでなく、現地の人々が自力でシーセフ・リーダーズ・アカデミー (CLA) を運営できるよう支援することが当財団の活動です。

<sup>iv</sup> 大学院でロヒンギャ問題を研究しました。